

Symbio Community Forum

News Letter
Vol.9 2012

吉川榮和 会長

NPO化後6年の新たな展開を期待して

シンビオ社会研究会の会員情

活動報告

シンビオ講演会・懇親会（黄檗会と共催）報告

会員寄稿

一福島事故 文系の見た原子力発電
一福島事故 理系の見た原子力発電

会長挨拶

NPO化後6年の新たな展開を期待して



シンビオ社会研究会の平成十八年七月十五日NPO法人移行以来、今年は六年目の活動年度を迎えました。

本会は、「一年ごと」に理事と監事全員改選しますが、今回はとくに国際ジャーナル「原子力安全とシミュレーション」(IJNS)の編集体制の強化や研究談話会活動の拡大とさらには今年からニューズアンドレポート発刊に着手のため、前期の理事数十六名より四名増やし、二十名と致しました。初刊以来三年目の英語による国際ジャーナルIJNS発行の一層の充実と、当会のホームページ更新、研究談話会活動の拡大と連携しての和文電子ジャーナル「シンビオニューズアンドレポート」の今年からの発行開始によって『科学技術の人・社会・環境との調和、共生』を趣旨とする本会の、研究調査、国際協力、社会啓発活動がより一層活発になり、効果を上げることが期待しています。

昨年三月十一日東日本大震災を契機に発生した東電福島第一発電所事故の社会的影響は甚大なものがあります。事故後一年を越した今年の五月五日深夜に北海道電力泊原子力発電所三号機が運転停止し、わが国の原子力発電所はすべてが停止し、それ以降関西電力大飯三、四号機の再稼動を巡って政府、福井県、京都府、滋賀県、大阪府の調整が難航しています。国際ジャーナルIJNSでは昨年六月号以来、毎号に東電福島第一発電所事故後の社会的動向の展望記事を連載してきましたが、事故後一年経過の今年三月号で一旦シリーズ記事掲載を終えました。今後、事故調査結果の最終的公表、原子力規制やエネルギー政策の変更などの帰趨を見極めたうえで、適当な機会にIJNSに取りまとめ記事を企画したいと思っておりますが、本ニュースレターでは、副会長の杉万先生と当方とで福島事故を、文系と理系の目でも振り返る記事を寄稿しました。文系、理系とはいえもとより両名のこれまでの学術分野とその研究活動の経験からの限られた視点からの意見ですので、各位からのご批評をいただきましたら幸いです。

特定非営利活動法人 シンビオ社会研究会 会長 吉川 榮和

役員リスト

(任期：平成24年5月19日—平成26年5月18日)

役職名	氏 名	役 割
会長	吉川 榮和	総括・総務
副会長	杉万 俊夫	国際連携事業
理事	吉田 民也	総務
理事	大須賀 安彦	学術事業
理事	中村 洋之	国際連携事業
理事	作田 博	学術事業
理事	久郷 明秀	社会啓発事業
理事	横山 拓道	社会啓発事業
理事	田中 俊彦	社会啓発事業
理事	手塚 哲央	社会啓発事業
理事	五福 明夫	国際連携事業
理事	松本 英治	学術事業
理事	下田 宏	国際連携事業
理事	長松 隆	学術事業
理事	伊藤 京子	学術事業
理事	山本 倫也	学術事業
理事	亀井 敬史	学術事業
理事	石井 裕剛	学術事業
理事	新田 純也	学術事業
理事	張 奇	学術事業
監事	永里 善彦	
監事	新田 隆司	

会員の種類

シンビオ社会研究会の会員には次の4種類があります。

1. 正会員 2. 登録会員 3. 賛助会員 4. 海外連絡会員

海外連絡会員は、理事会の推薦で会長が海外の個人に委嘱しています。

各会員の入会金、年会費とサービス内容は、下表の通りです。なお、海外連絡会員は、入会金、年会費は不要です。

●本会の行う活動行事等にご参加の方には、ご本人の同意を得て登録会員になってもらうようにしております（入会金、年会費不要）。登録会員から正会員への変更には入会金は不要です。

●正会員で2年間正会員費を滞納されると自動的に登録会員に変更します。

また、2012年度より賛助会員に個人会員を設けました（賛助会費は寄付金とみなされます）。

入会の方法

シンビオ社会研究会のホームページをご覧の上、ホームページより会員入会申込書をダウンロードして、下記のいずれかの方法で申込書をご送付下さい。

●郵送の場合

〒606-8202 京都市左京区田中大堰町4-9

（財）応用科学研究所内

シンビオ社会研究会 事務局宛

●電子メール添付の場合

シンビオ社会研究会 事務局メール symbio-office@nike.eonet.ne.jp

	正会員	登録会員	賛助会員	
			（団体）	（個人）
入会金	1,000円	×	×	×
年会費	2,000円	×	50,000円/ 1口以上	2,000円/ 1口以上
ニュースレター送付	○	×	○	○
講演会のメール案内	○	○	○	○
協賛行事のメール案内	○	○	○	○
国際WSや 研究談話会参加	○	正会員への変更 ないし賛助会員 （個人）の資格で参 加できる	○	○
セミナーの割引	○	×	○	○
見学会の割引	○	×	○	○
ホームページから 活動報告の入手	○	○	○	○
総会での議決権、役員 選挙権、役員被選挙権	○	×	×	×
シンビオの各種プロジェ クト活動への参画	○	×	○	○

シンビオ講演会・懇親会（黄檗会と共催）報告

石井 裕剛 記

平成二十四年五月十九日（土）に京都大学百周年時計台記念館にて、シンビオ講演会および懇親会を黄檗会との共催で開催しました。黄檗会は京大の宇治キャンパスにあった旧原子エネルギー研究所の若林二郎研究室、それを継承した吉川榮和研究室および下田宏研究室、平成十年から平成十二年の間に設置された関西電力寄付講座（宮沢龍雄研究室）のOB・OGの同窓会です。

講演会は、黄檗会会員の三谷拓也氏（株式会社フオーカルワークス取締役CTO、弁理士）による「知的財産の仕事と知的財産のビジネス（化）」から始まりました。三谷氏には日本の特許事情や弁理士の仕事とはどういうものかなど、自らの豊富な経験をもとにお話いただきました。その後、本年四月から京都大学大学院エネルギー科学研究科の教授に昇任の下田宏先生から、「エネルギー情報学研究室の研究活動紹介」と題して、拡張現実感技術を利用した原子力プラントの現場作業支援の研究、スマートフォンによる環境配慮行動を促進するオンラインコミュニティの研究、オフィス環境と知的生産性に関する研究等、下田宏研究室の最近の研究活動の紹介がありました。

吉川榮和先生の古稀の祝いを兼ねた懇親会には、若林御夫妻をはじめ多くの方に御参加いただき会場が狭く感じるほどでした（参加者約五十名）。吉川榮和先生への花束贈呈、記念撮影、参加者全員による二十秒制限の自己紹介・近況報告など、終始和やかな雰囲気で行うことができました。

講演会・懇親会の開催に御協力いただきました皆さまの方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。



黄檗会・シンビオ社会研究会 吉川榮和先生 古希お祝い

平成24年5月19日 於：京都大学百周年時計台記念館

福島事故 文系の見た原子力発電

杉万 俊夫 記

あの時点で、「全電源喪失は想定外だった」ことは認めざるを得ないのではないか。一九九〇年代以降、八時間以上の全電源喪失は、原子力安全委員会でも議論されなくなった。問題は、「なぜ想定外になってしまったか」である。

おそらく、産官学を問わず原子力の専門家であれば、全電源喪失の可能性は頭の片隅にはあったはずだ。想定外とされるか否かは、本人が想定外と思っているかよりも、「周りの他の人たちは想定外と思っている」と思うか否かによって規定される。株の売買と同じである。自分が上がると思う株ではなく周りの人々が上がると信じて飛びつくだろうと思う株を買う。

多くの専門家が互いに「皆、想定外と思っている」と思いあう事態は、極めて構造的である。個人主義に言う「個」が確立していない日本では、上記のメカニズムが欧米よりも強く作動する。しかし、それ自体は、決して欧米よりも日本が劣っていることを意味しない。東日本大震災の後も、避難所で日本人が示す秩序だった行動には、外国から賛辞が送られた。その秩序だった行動は、「周りの人は、自分勝手をしてはいけなと思っています」と、みな思っていたからだろう。

では、避難所と原子力村の違いはどこにあったのか。原子力村という言葉は、しばしば批判の言葉として使われる。しかし、原子力のような特殊な技術を土台とする世界が「村」を形成するのは当然である。むしろ、村のあり方にこそ、問題があったのではないか。村の中に、利害を異にする集団が存在するの当然だ。しかし、いかに利害が異なっているようにとも、村の存続のためには、時として集団同士で激しく意見を戦わせる必要があるだろう。個々の集団が自らの権益だけに捕らわれていたこと、他の集団との関係は、自らの権益を守るためにのみ保持する関係になってしまったこと、そして、自らの権益にとつての村しか考えなくなったこと……そこに、「皆、想定外と思っている」と安直に思いあててしまう原因があったのではなからうか。

福島事故 理系の見た原子力発電

吉川 榮和 記

二十一世紀地球温暖化問題の解決。これは一九九六年発足の京大大学院エネルギー科学研究科の設立理念だった。これはまた日本の原子力推進派にとって渡りに船だった。ここ十年余、原子力委員会に糾合の当該リーダーたちは、『富国強兵』の明治維新政府を髣髴させる『原子力立国』という復古調エネルギー政策を先導したが、福島の水素爆発は原発とともに『原子力立国』も吹き飛ばしたようだ。

地球温暖化問題を『エネルギー、環境、経済のトリレンマ』と定義しつつ、一九九七年京都プロトコル時代に華々しく登場の環境経済学派は、当時は炭素税導入を主張し、今は脱原発を先導する。だが一九九七年当時世界第二の経済大国の地位はすでに中国に奪われ、赤字国債累積で国際的地位低下一方の日本。福島事故で最早世界の地球温暖化を懸念する余裕のない日本。今は自らのエネルギー、環境、経済のいずれもが問題山積になった。

理屈は美しいが、達成は無限に後退し莫大な税金を浪費するばかりでなく人間性の腐敗・抑圧まで随伴するハードエネルギーパス。今や軽水炉・高速炉・核燃料サイクル・高レベル放射性廃棄物処分路線の桎梏から解放され、エネルギー、環境、経済のアポリーア解決のあらゆる可能性に、あらゆる出自、あらゆる有志の人材が平等に挑戦し、切磋琢磨する。これがポスト福島の日本復活の道ではないだろうか。



福島第一発電所遠景

(左上から時計まわりに1,2,3,4号炉・平成23年10月頃撮影。東電提供)

2011年度の主な活動実績

2011年	
4月28日	第1回理事会・通常総会・シンBio講演会
6月21日	研究談話会
6月末	国際ジャーナルIJS第2巻第2号
8月21-25日	ICI2011(韓国、大田)
8月29日	GCOEエネルギーセミナー
8月30日	シンBio国際ワークショップ 2011
9月末	国際ジャーナルIJS第2巻第3号
10月19日	第2回理事会・研究談話会
10月28日	HI学会研究会
11月25日	関東シンBio・黄檗会(東京)
12月末	国際ジャーナルIJS第2巻第4号
2012年	
2月27日	第3回理事会・研究談話会
3月9日	「エネルギー環境問題の国際動向を考える」講演会

2012年度の主な活動予定

2012年	
4月末	国際ジャーナルIJS第3巻第1号
5月19日	第4回理事会(2011年度) 通常総会・第1回理事会・講演会
6月末	国際ジャーナルIJS第3巻第2号
8月29-31日	国際会議STSS 2012(岡山)
9月3-4日	シンBio国際ワークショップ 2012(京都)
9月19日	第2回理事会・研究談話会
9月末	国際ジャーナルIJS第3巻第3号
10月24-26日	国際会議ISSNP 2012(中国・シンセン)
11月中	第3回理事会・研究談話会
11月中	関東シンBio・黄檗会(東京)
12月末	国際ジャーナルIJS第3巻第4号
2013年	
1月下旬	第4回理事会・研究談話会
3月上旬	「エネルギー環境問題の国際動向」講演会
3月末	国際ジャーナルIJS第4巻第1号

発行 特定非営利活動法人 シンBio社会研究会
〒606-8202

京都市左京区田中大堰町49

(財)応用科学研究所内

TEL/FAX: 075-204-1559

E-MAIL: symbio-office@nike.eonet.ne.jp

URL: <http://sym-bio-jpn.org/>